

1. そして、朝早く、イエスはもう一度宮に入られた。民衆はみな、みもとに寄って来た。イエスはすわって、彼らに教え始められた。すると、律法学者とパリサイ人が、姦淫の場で捕らえられたひとりの女を連れて来て、真ん中に置いてから、イエスに言った。「先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。(8:2-4)
 - a. 多くの権力者がイエスを殺そうとしている中で、イエスは死に直面しながらも忠実に人々に神のことを語り続けている。時としてイエスに従うことは勇気を伴い、特にイエスの再臨が近づくほどより一層の勇気が求められる。
 - b. イエスが教えられている最中に何人かの宗教指導者たちが姦淫の場で捕らえられた女を連れて来た。これはどう考えてもイエスにとって危険な状況である。部屋の中には人々の様々な思いが交差していた。
 - c. これは心理作戦と呼ばれるもので、敵が策略を進めるため人々を混乱させようとする手段である。サタンが善を悪に、悪を善に見せかけようとする典型的な作戦である。
2. モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」彼らはイエスをためしてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた。(8:5-6)
 - a. ここでサタンはさらに悪を善に見せかけるため聖書のみ言葉を用い、本当のたくらみを覆い隠そうとしている。彼らの心はみ言葉を実行することからはかけ離れていたし、いかにも信仰深いように見せかけていたが、本当の意図はところどころに見え隠れしていた。
 - b. 彼らは信心深く見せかけようとしていただけだということにお気づきだろうか。たとえば姦淫に関わった相手の男はどこか？また何もしらべることなくなぜこのような形でこの女を罪に定めるのか？
 - c. イエスはこれが巧みに考案された罠であることを察し、彼らが期待したような答えはせずしばらく地面に書いておられた。彼らの罠とは、イエスはローマの法を破り女を石打ちにするだろうか、あるいはモーセの律法を破り女を見逃すだろうか、と試すことであった。
3. けれども、彼らが問い続けてやめなかったので、イエスは身を起こして言われた「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」そしてイエスは、もう一度身をかがめて、地面に書かれた。(8:7-8)
 - a. イエスはようやくお答えになり、条件付きで人々がモーセの律法に従うようにされる。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」
 - b. イエスは罪を見逃したとかみ言葉を無視したりしたわけではない。イエスはみ言葉の成就のため来られ、それを示された。それも怒りや流血や悪によるのではなく、愛によって。
 - c. イエスはもう一度地面に書かれ、この時点で人々はひとりひとり出ていった。
4. 彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた。イエスは身を起こして、その女に言われた。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。」彼女は言った。「だれもいません。」そこで、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」(8:9-11)
 - a. イエスはこの女を死刑、恥、非難、罪から救った。しかもモーセの律法を犯さずしてこのすべてを行ったのである。モーセの律法では判決を下すためには2人ないし3人の証人が必要とされるので、法的にもイエスが一人で石で投げることはできないし、イエスはそのつもりもなかったであろう。
 - b. イエスは罪を軽く扱われたのではない。この章の次の場面ではイエスは罪を向き合われる。罪を軽く扱うことと、恵みと憐みの間にははっきりとした一線があるし、罪を軽く扱えば罪が一層力を増し周囲に悪影響を及ぼす。一方で恵みと憐みは罪の力から私たちを解放し、罪にさいなまれる苦しみから私たちを洗い清めてくださる。